

名古屋附近の工事見學と

日 本 ラ イ ン 下 リ

土木學會春のエキスカージョンに参加するため、5月20日午前10時30分東京驛後の下關行列車に乗る、同行2人、車中混雜の煩もなく、横濱にて福山へ歸る家兄夫妻を迎へ同行4人となる。

初夏の郊外は車窓に新緑の氣が満ち、海もよし、山も良しの眺めである。特に湘南あたりから雪を被つた富士の峰が、ホツカリと雲上に聳ゆる眺めは何よりの氣分である。

午後5時1分、名古屋驛に着く、改築後の名古屋驛はさすがに中京の表玄関として宏壯なる建築が特に目立つてゐる。驛前から市電にて鶴舞公園に行き、池畔を散歩し、公園前から再び市電八事行に乗り森林部落をすぎ、不良軌道の動搖甚しい電車を八勝館前に下車した。市内とは云へ、東京で云へば井ノ頭が石神井附近の環境に似てゐる處である。

今夕の宿泊所であり、懇親會場である八勝館の古風の門を入れば、市電に揺れた氣分も忽ち落付いて來る、八勝館は自然の森と林を取入れた純日本風の庭園に、茶室造りの純日本間が大小幾つも配置された旅館兼料亭である。建築に近代的な意匠を加へない處に八勝館の特色ありと云ふべきか、室内に雲照律師の筆になる八勝館の命名額がある。

控室に入れば、堀越副會長を初め、中部支部長の北澤教授其他會の幹部諸氏を中心に、關東、關西其他各方面よりの参加者に賑はつてゐる。

食堂の準備なつて一同大廣間に移ると、此所は新築の木の香も高い、明るい室だ。數人宛圓卓を圍んで座に着くや、北澤支部長拍手に迎へられて立ち、中部支部を代表して歓迎の辭を述べ、之に對し堀越副會長より参加會員一同を代表した町重なる挨拶あ

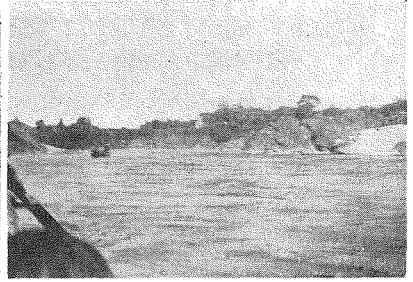
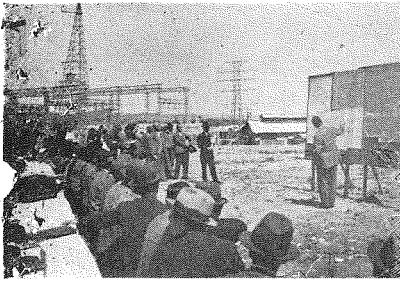
り、兼て土木學會25周年記念事業に對する各方面の協力を希望され、次いで最近内務省より名古屋市水道局長に就任した田邊良忠氏より力強き歓迎の辭があり、やがて八勝館得意の日本料理に、市内盛榮連の中京婦人のサービスにて一同歡談裡に軽く杯を重ねた。

宴中に餘興として盛榮連婦人の長唄舞踊あり、次いで田邊良忠氏吟聲の少女劍舞あり、次いで北澤忠男氏の謠曲八島の仕舞があつた。地謡は平川保一氏他2名で、此仕舞の餘興は今夕の壓巻であつたのみならず、北澤氏の餘技として實に入神の藝術であると思つた。

我等は早く宴席を切りあげて、一浴し、眞島博士と一石を圖んだ、二日を置いて尙ほ三月の敗を取つたのは汽車の勞れでもあつたか、八勝館に靜かなる一夜を安眠して、翌21日は愈見學デーである。一同廣間に會して朝餐を終り、新緑に包まれた玄関前から、ハイヤー拾數臺を連れて先づ熱田神宮に參詣した。境内は早朝から既に參詣者が群をなし、特に小學兒童の小團體が幾つも、幾つも熱心に參進し、代表の一少年が先頭に出て、祈願文を朗讀せる様は、戦時の小國民の意氣も見えて、まことに頼もしき事である。

我土木學會一行は會旗を先頭に拜殿前に整列し、堀越副會長は神前に參進し玉串を捧げ、一同參拜を終つた。

それより名古屋鐵道會社線の神宮前驛より特別仕立の電車に乗り、名古屋港に下車し、三艘のランチに分乗して、港内の一部を見學した。港内は船舶も少く見えたが、陸上の設備は何れも活氣に満ちた狀



態であつた。港務所に於て奥田所長より、名古屋港の沿革、工事、現勢、將來の計畫等を圖面に就て説明された。

港務所見學を終り、一同バスに分乘して港の一部に在る、中部共同火力發電株式會社の發電所を見學に向つた。先づ荒子川岸に設けられた石炭荷揚運搬設備に就て佐々技師の説明があつたが、30萬キロの火力發電用の給炭設備として重要な役割を有するものだけに、クレーン、ベルトコンベヤー等の機構も巨大なもので、臨海工事の代表的な見學であつた發電所建物内は一行數班に分れて、火力發電の各機構を詳細に見學したが、目下5萬キロ1臺のみが發電中で、他は目下盛に工事中であつたから、平常見られない巨大な火力機の据付、組立などの工事を見學する事が出来たのは非常な幸便であつた。

一行は再びバスに分乘して、市内商店街を視察しながら、名古屋鐵道會社押切驛に到着した。正午すぎ押切驛發の特別電車二輛に分乘して木曾川今渡に向け出發した。

爰で本日の見學プログラムにはないが、一行の見學に多大の便宜と好意を寄せられてゐる名古屋鐵道會社のある事を記し度い。同社は名古屋市を中心とする隣接各地方の民間鐵道を殆んど全部統一して、所謂大都市交通網の整備に努力し、今や其總延長360浬餘に達し、尙ほ一層の統制擴大を計畫中である。此點は全國大都市交通統制の先驅をなすものとして注目される。目下省線名古屋驛前に一萬餘坪の大デパート用のビルテング建築を計畫し、其地下に於て會社は東西の社線の連絡を完成し、斯くて名古屋附近の鐵道其他の交通機關の統制は益々完璧を期するわけである。目下其爲の工事は着々進行中で、我等が乗れる車窓の左側に高架線のコンクリート工事が見える。

一行の特別電車は市外に出て尾張平野の綠の畑の間を進む、右の車窓遙かに木曾御嶽山の雪の峰が大

きく見える。車中には名古屋鐵道會社の好意による午餐の辨當やビールが運ばれる、會社から特に案内係として乗込んだ名所アナウンサー君がユーモアたつぶりの名調子で沿線の古戰場や、桃太郎の鬼ヶ島などを説明する。1時間餘りの急行電車も忽ちにして木曾川沿岸の今渡に着いた。

一行は木曾川沿岸の好展望の廣場に集まり、愛岐電力株式會社の今渡發電所建設工事の特色ある現地講演を聞いた。眼下には木曾川の清流を横斷して白堊の橋の齒を列べた様なコンクリートダムと、白堊のビルの様な發電所建物とが、近代的建築構造美の異彩を放つてゐる。木曾川筋の發電所も數多くあるが、今渡發電所は其最下流に在るもので、落差僅かに13米餘に過ぎないが、最大200立米の水量を利用する特種機能を有する發電所である。講演を聞いて後一行は直に發電所内部より、魚道、取水口、放水路等を見學し、堰堤上を對岸に渡り、徒歩にて木曾川右岸を下り、今渡橋を渡つて再び左岸に出で、橋の下流で所謂日本ライン下りの舟に乗つた。

川舟は細長い小舟であるが、12人の客が樂に足を延して座する事が出来る。舟の前後に1人宛の船頭がゐて、激流奔湍も手際よく流すのである。犬山町まで4里の日本ラインを約1時間で下るのであるが、左岸の絶壁と新緑と、右岸の變化に富んだ岩盤と、清冽なる河の流れと、まことに日本ラインとは良く名づけた自然の一大景觀である。名古屋市から僅かに1時間餘で此天然の致景に接する事の出来るのは、之も日本人に與へられたる自然の大なる恩恵であると思ふ。

犬山町に上陸して附近沿岸を散歩し、木曾川に訣れ、名古屋鐵道の急行電車にて名古屋市に戻り、夕刻此有意義なる見學を終つた。(一記者)

(寫眞説明は次頁へ)